

ミルトンとラムス

道家 弘一郎

Peter Ramus, the famous French philosopher, is said to have influenced three major English poets : Sir Philip Sidney, Christopher Marlowe and John Milton. Milton wrote a large text-book of Ramean logic. Marlowe made Ramus appear on the stage of his play entitled *The Massacre at Paris*. Sidney did not mention in his work, though he must have seen Ramus face to face.

Probably it will take a long time for a revolutionary thinker like Ramus to influence foreign literature. It can be easily supposed that Sidney must have had a letter of introduction written by his mentor John Dee to Ramus. However, he was one too deeply immersed in traditional thought to have been influenced by this new logician. On the contrary, Marlowe correctly accepted Ramus's message, the essential points of which are two : the simplification of logic by dichotomy and the distinction between artificial and inartificial arguments. Marlowe makes Guise say in *The Massacre at Paris* that on account of these two points, Ramus should be killed.

Cambridge University began to import Ramean logic while Ramus was still alive. Christ's College to which Milton belonged was a bulwark of Ramism in the earlier 17<sup>th</sup> century. Therefore it is natural that Milton should have compiled a text book of Ramean logic with which he wished to teach his nephews. Milton published this work, which had been written about 30 years earlier, two years before his death. Considering the depth of Milton's regard for Ramus, I have always thought that Milton's verse would be saturated with Ramean logic, and I hope to illustrate how this is so during the presentation of my paper.

In the 17<sup>th</sup> century Ramean logic was favourably accepted as a practical weapon by Puritan priests and lawyers on the pulpit and in court. The dichotomy of 'either/or' which forms the basis of this logic of persuasion had a strong power, which is, moreover, made manifest by Satan when he successfully tempts Eve to eat of the forbidden tree (*P.L.* 9.679-732). The best example of artificial vs. inartificial arguments is found in opening five lines of the first book of *Paradise Lost*.

At the same time, we can re-read Milton in relation with Robert Fludd who belonged to the old-fashioned intellectual world. According to Denis Saurat and Frances Yates, cabalism led Milton to the doctrine of *creatio ex deo*. But a recent study of the Old Testament indicates that *creatio ex nihilo* is a doctrine which was made by the second-century church fathers. I am inclined to think that cabalism and hermetism, which are associated with Fludd, have held in those days an older level of thought than that of the Christian church. It is the ad fontes Renaissance tendency in Milton that makes him appear heretical to readers of today.

(This paper was read at the 24th General Convention of Milton Center of Japan in Ôtemae Women's College on October 31, 1998.)

この表題のもとに私は、ペトルス・ラムス(一五二五—七二)が、ミルトンらイギリスの詩人たちに与えた影響をお話したいと思います。

私は私の研究の出発点から主知主義と主意主義の対立という視点からミルトンを研究してまいりました。パーシル・ウイレーヤ<sup>(1)</sup>、(これはミルトン学者ではありませんが)ウォルター・ジャックソン・ペイトの研究を見ましても、確かにこの対立を視野におさめたものでありますが、主知主義対主意主義ということばが直接使われてはおりません。その点 Herschel Baker, *The Wars of Truth* (Harvard University Press, 1952) は例外的に voluntarism ということばが頻繁に用いられております(反意語はおおむね rationalism)。そしてこの書物のなかに Ramean Logic という一章があり、ラムスに眼を開かれたのはこれによつてでした。

スコラに代つてラムスがもてはやされたのはなぜか。その理由は、スコラの主知主義にとつてかわる主意主義がここにあるからだ、ということ指摘したのはペリー・ミラー<sup>(3)</sup>でした。

またペリー・ミラーは、ラムスが影響を及ぼしたイギリスの文学者を三人挙げております。それはサー・フィリップ・シドニー、クリストファー・マローウ、そしてジョン・ミルトンであります<sup>(4)</sup>。

ミルトンの著作のなかに浩瀚なラムス論理学の教科書のあることはご存じのとおりです。マローウには *The Massacre at Paris* という作品があり、そのなかにラムス殺害の場面があります。しかし、シドニーにはラムスへの言及はありません。しかしシドニーだけはラムスに直接面会したことがあるに違いない、と状況証拠から推測することができます。

シドニーはそれこそ語学研修のために一五七二年五月末パリへ向かつて出発します。<sup>(5)</sup> そのとき一八歳。彼の家庭教師ジョン・ディー(一五二七—一六〇八)は一五五〇年の夏以来ラムスと親交がありましたし、駐仏大使フランシス・ウォールシンガムは(後に娘をシドニーに嫁がせることになりましたが)ラムスに面会したという日記の記入もあり、今回はシドニーの後見を依頼されましたから、こういうつてを頼ってシドニーの方からラムスに面会を求めたと考える方が常識にかなっております。しかし到着後三か月足らず、八月二三日に、あの聖バーソロミュー祭の虐殺がおこり、シドニーは命からがら難をフランクフルトに避けることになりました。<sup>(6)</sup>

ラムスの思想のメッセージを最も的確に把握したのはマローウだったと思われれます。「パリの大虐殺」はマローウの最後の作品と思われれますが、内容がすこし雑然と詰まりすぎていて作品として上等とはいえません。だが、そこに描かれたラムス虐殺の場面は、ラムス主義のエッセンスを簡潔に述べています。それは二分法と、もう一つは *artificial argument* と *inartificial argument* の区別です。あの虐殺事件の首謀者ギユイーズが、ラムスを *'that dichotomist'* (第六場二八行) といつて非難します。*'Argumentum testimonii est inartificiale'* (第六場三四行) なんてラテン語を引用し、こんなことをいう人間には死んでもらう、といっています。「証言による論拠は人為的でない」なんて訳の分からないことばが何故死罪に値するのか。それは、このことばがそれだけ重要な意味をもつからです。 *inartificial* というのは、*Of an argument: Not according to the art of Logic: not deduced by logical methods from accepted premises, but derived from authority or testimony. Obs: (OED 3) 'artificial' の方は 'According to the rules of art' (OED III 10) とあります。これは後のカントの理性批判を連想させる区別で、 *inartificial argument* によつて、論理的な証明によつては確認することのできないような論拠を意味し、啓示神学に対して論理学上の場所を提供することができたのです。スコラの主知主義によつて立つカトリック勢力が目敵にしたのは当然だったのです。*

四四行目に… my places being but three ということばがあります。これだけではちんぷんかんぷんですが、places とはいわゆるトボスのことです。ラムスはアリストテレスの『分析論後書』から出発して、(すべてについて de omni)、《そのもの自体に即して per se》、《全体について「普遍的」 de universal》という三つの分析方法を区別し、それに対応して「真理」「正義」「英知」という三つの領域を考へていたとされますが、これなどもどこか後のカントの三批判に通じるところがあります。これをスケギウスがけなしたために二人の間に激しい論争があったことが知られています。<sup>(8)</sup>一五九三年にゲイブリエル・ハーヴェイの書いた文章のなかに、次のような一節があります。「一時私は、大波が互いにおつかり合う海に浮かび、熱心な飽くことを知らぬ貪欲さをもつて多くの有名な論文を貪り読んだ時期があった」といって、甲論乙駁する学者たちの名前をずらりと挙げています。プラトン主義者とそれに反論するアリストテレス、そのアリストテレスに反論するラムスたち。「しかしそのラムスを向こうにまわして、ペリオニウス、ガランディウス、カルベントリウス、スケギウス、リエブレルス等、大勢の弁護者が学寮長や大学評議員の味方につかないはずはない。それなら、この王立雄弁・哲学教授(「ラムス」)にお気に入りの寵臣はいないのか? タラエウス、オサトス、フレイギウス、ミノス、ロディングス、スクリボニウスたちは、ラムスの側に立って彼らに反論する。こんなふうには私は、あの論理学と哲学の熱い論争の過程のなかにいた<sup>(9)</sup>」といっています。

ここに当時の醗酵するような知的興奮を感じることができます。ラムスを真中にして、その左右に賛成者・反対者の名前が列挙されています。

ケンブリッジが新しい革命的思想の発信地となったことは当然ですが、その名前をあげると、

ローレンス・チャダートン(二五三八—)

ゲイブリエル・ハーヴェイ(二五四五—一六三〇?)

ウィリアム・テンブル（二五五五—一六二七）

ウィリアム・パーキンズ（二五五八—一六〇二）

ジョージ・ダウナム（？—一六三四）

アレグザンダー・リチャードソン（fl. 一六五〇頃）

という人たちがいました。

ミルトンが甥のフィリップス兄弟の教育を引受けた二六四〇年代後半、ミルトン自身の作った論理学教科書が「ラムスの方法に則った」ものとなったのは自然なことでした。論理学ばかりか、算術や幾何の教科書もラムス主義者の書いたものでした。

ミルトンの、その『*The Art of Logic*』ラムス論理学教程』の中味に立入って検討することは、少し煩わしい感じがします。たとえば第二部「排列論」に第十六章「第一分離三段論法」の付録「省略三段論法、両刀論法、連鎖論法」というのがあります。両刀論法というのは *Dilemma* の翻訳ですが、ほかの用語は馴染みのない学術用語 (*Enthymeme, Sorites*) で、発音さえ自信がありません。ダイレンマの例として挙げられているのは紀元前六世紀ギリシア七賢人のひとりとされるピアスの文章です。<sup>(10)</sup>

あなたの結婚する女性は、美女か、もしくは醜女である。美女であればその女は浮気をするであろう。醜女であれば苦痛の種となるであろう。いずれもよろしくない。だから、人は結婚すべきでない。<sup>(10)</sup>

娘のアンやメアリーが生まれた、三八、九歳のころのミルトンの気持ちがるような気がします。

小難しい専門用語にはうんざりしますが、引用されている例は古典古代作家の文章が中心で、いかにもミルトンらしい教科書です。

私はこれを論ずるよりもむしろ、ラムスの論理がどこまでミルトンの詩のなかに浸透しているかの方に興味があります。ここでは先ず「失樂園」冒頭のインヴォケイション二六行から述べたいと思います。

第一行の「人間の最初の不従順」は artificial argument であり、それを受けて第二行の「禁断の木の実とそれを味わうこと」というのは聖書にもとづく証言であって artificial argument であります。しかも両者は同格の and で結びつけられて同じ事柄を表しています。「世界に死と苦しみがもたらされた」という第三行は artificial であり、「エデンの喪失」という第四行は artificial であります。これも同じ事柄を表わしています。第四行後半の「キリストの来臨」は inartificial であり、第五行の、未来における「人間とその幸福の回復」への祈りは artificial であり、しかもこの二つも同じ事柄の表現といえます。こうして一行おきに、過去と現在と未来について、人間の本性のなかに明白に知覚できる、その属性ともいべき自然な事実が、すなわち artificial argument が、聖書のなかで読む以外には知るすべもない inartificial argument と並べられています。だから一行おきに読んでも十分に人間の具体的現実を知ることができます。

ミルトンの「神慮の正しさを人々に証明する」(二六行)という作業は、inartificial argument を artificial argument の領域にもたらすことでした。そうすることによって初めて、inartificial argument を「それ自体には「証明の能力」のない証言を、つまり「信仰」を、「論理」として人に納得させることができます。これは一面では現代神学における「非神話化」の先取りともいえるものです。

この五行においてすでに二分法は鮮やかに認められますが、「天の詩神」(六行)ということばにはギリシア的異教

的なものにキリスト教のエピセツトを冠せて押さえこんだ感じがあります。それがさらに内面化されると単に「おお靈よ」(二七行)という純粹にキリスト教的な呼びかけとなります。九一—一〇行目における天地の創造は単なる物理的な自然現象ですが、一九—二三行目における創造は、その過程にも委曲をつくし、超自然的な神の靈の行為であることを強く印象づけます。と同時に、それは、詩人の創作活動も神の創造にあやかるものであることを暗示して、直ちに二二—二三行目の祈りへと結びつきます。

七行から一〇行では旧約が、一〇行後半から一二行にかけては新約が、一五行目では古典古代が言及され比較されますが、目指すところは、異教的なものでももちろんなく、旧約的なものでもなお足りず、aboveとかorという選言的なことばをつかって、純粹にキリスト教的・新約的なものであることを示します。

「シロアの流れ」(一一行)は、シロアムの池から流れ出すもので、イエスによる盲人の癒し(ヨハネ伝九章一—七節)を暗示しています。盲目が罪の結果であると考えられていた時代に、イエスは、それは神の「みわざが、彼の上に現れるためである」(三節)と語りました。この価値の転倒と罪からの解放が、神殿のすぐ傍を流れる小川のように始まったばかりのささやかな動きとなつて、不動の山とのコントラストをなしています。

六行から一〇行にかけては、高いところから低いところへ向かう、また一から多へ向かうベクトルがあります。一行目のシロアの流れにおいて、水は最も低いところを選んで流れますが、ここからは一転して、一二行目には「私」が登場し、中途半端は許さないという激しい上昇となります。そして、この上昇・飛翔は純粹化・内面化をも意味します。

ところでアリストテレスは、キネシス(運動)には四つの原因があるといっています。一、質料因、二、形相因、三、動力因、四、目的因または究極因、です。たとえば銅像を作るにも、一、質料たる銅、二、像のかたち、すなわ

ち鑄造家の脳中にある凶案、三、動力としての手、器具など、四、何のためという目的です。これをここに当てはめると、一、質料因は原罪、二、形相因は叙事詩ながら未だかつてなきほどのもの、三、動力因は天の聖霊および私、四、目的因は摂理の証明、ということになります。

この動力因に關してですが、初めは「天の詩神」に「歌え」といつていたものが、一三行目では私の歌を援けるものになり、そして最後には「私」が前面に出て主張し、証明する者となります。「歌え」といつた直後に、*Muse*は靈感を与えるものであり、*shepherd*はそれをそのまま受けて教えるものであることが語られます。*shepherd* = *poet-priest*の使命は、靈の促すまま、いささかの翳りも交えないで伝えることであり、そういう詩人こそミルトンの撞れる模範ですが、ともあれ、動力因が一つではないところ、そして先述のような選手交代が行われるところに、インヴォケイションというものの性質がよく表われていると思います。その点は、アリストテレスの論理を当てはめて初めてよく分つたような気がします。

ラムス論理学が法廷の弁論や教会の説教に威力を發揮したとはしばしば指摘されることですが、それは「あれか、これか (Either/Or)」の二分法で切りこんでゆく迫力のせいです。それが最もよく現われているのは、セイタンによるイーヴ誘惑の場面です。セイタンは、善悪を知るの樹の実を食べたために、蛇ながら人間の言葉を話しようようになった、としたら、どうして、

動物に開かれていることが人間に  
閉ざされているのでしょうか？

Shall that be shut to men, which to the beast

Is open?

(九・六九一―九二)

といい、こんな些細な咎に対して神は怒るところか、人間を神々の地位にまで高めることになる決断を賞賛こそすれ、罰するはずはない。

善なら禁ずることがどうして正しいでしょうか？ 悪なら、もし悪なるものが

本当にあるなら、どうして知ってはいけないのですか、それだけたやすく避けられるのですから？

それゆえ、神はあなたがたを罰して、なお正しいということはできません。

正しくなければ神ではなく、神でなければ畏れるおそこともないし、服とがうこともありません

Of good, how just? Of evil, if what is evil

Be real, why not known, since easier shunned?

God therefore cannot hurt ye, and be just:

Not just, not God; not feared then, nor obeyed:...

(九・六九八―七〇二)

とたたみかけ、この禁令が全く理不尽なものであることを説きます。ここに一番小気味よく二分法が効いているように思います。

翻ってシドニーには、ラムスのどんな影響があったでしょうか。結論を先取りしますと、二分法は認められますが、

artificial vs. inartificial の区別は認められません。

シドニーの二分法は artificial arguments のなかでの二分法で、ミルトンの二分法が artificial 対 inartificial の二分法であったのとは対照的です。シドニーの二分法は水平的次元の二分法であったのに対し、ミルトンの二分法は垂直の次元の二分法であった、ということができます。

『アルカディア旧版』の冒頭を、ジョン・S・ローリーは次のように図解しています。<sup>(11)</sup>

アルカディアが、あらゆる国々のなかでも、とりわけ有名なのは、

一つは空気やその他の自然の

心地よい恵みのため

だが、

主としてその国民の温和な気  
立てのよい性質のためであ  
る。

彼らは

真の満足は自然の道を踏むこ

とによって得られ、

そして

他の国民が熱望する輝かしい  
栄光の称号が人生の幸福には  
実際少しも役立たないこと

を知る唯一の国民であり、

彼らの公平と先見の明によつて隣国に彼らを悩ます口実も ごとく 安寧を妨げるような動きをす  
 期待も与えない  
 誤った傲慢によつて他国民の  
 ることもない。

「だが」「そして」「ごとく」と、逆接・順接・例証の接続詞を用いて、部分と全体、自然と精神、自足と野心、他国と自国、美德と悪徳が対置され、見事な二分法というほかはありません。

しかし、ここに見られるものは artificial argument ばかりで、inartificial argument はありません。シドニーの思考はいつも自然の理性が扱いうる対象に限られていて、啓示によるほかは知られないような事柄は排除されています。その何よりの証拠は、代表作『アストロフィルとステラ』の第一番最終行に詩作の要諦として挙げていることばです。<sup>(12)</sup>

おまえの心の中を見て、書け

look into thy heart and write.

シドニーはラムスの影響下よりはむしろジョン・デイーの影響下にありました。デイーはシェイクスピアの『テンペスト』の主人公アロスペロのモデルといわれる人です。その知識は近代科学以前の錬金術や占星術を含むような賢者と呼ばれるタイプの人です。ラムスが新しい書記文化の流れの源に位置する人とするなら、デイーは古い口頭文化の最後を飾る人物といえます。

口頭文化においては、書記文化のなかにあるわれわれには想像もつかないほど記憶が重要なものとなります。したがって独特の記憶術が発達いたしました。つまり、記憶すべき事実や思想をさまざまな場所、たとえば部屋・家・街などのさまざまな場所に割り当て、その事実や思想を思い出さなければならぬときには、その割り当てられた部屋・家・街などの各所を順序よく思い出せばよい、というものであります。

シドニーは、詩はそれぞれの単語がおのずから占めるべき座をもち、その座がその単語を思い出させずにはおかない、ということになって完全な効果を發揮する、といっています。これは記憶術を念頭においた詩観で、詩は「物言う絵」<sup>(13)</sup>、「完全な絵」となり、哲学者も歴史家もまねのできない迫真力を、詩人は獲得するというわけです。

シドニーが「場所」もしくは「影像」に依存する「絵画的言語」を用いたとすれば、これを破壊して「論理的順序・排列」を重んずる「合理的言語」を唱えたのがラムスであり、それはプロテスタント教会の果敢な「外的偶像破壊」に照応する、精神の「内的偶像破壊」である、とフランシス・イエイツは述べています。<sup>(14)</sup>

こうして見てきますと、ラムスの影響は、シドニーにおいては当事者どうしは直接会ったことがあるにもかかわらず、すれ違いに終り、深刻な影響があつたとは思えません。シドニーより一〇歳若いマローウとなると、ラムスの衝撃をまともに受けています。しかしその影響が浸み込んだとはいえず、それには更に、マローウより四四歳若いミルトンまで待たなければならなかつた、といえます。しかし、私にとって嬉しくなるのは、「アルカディア旧版」の編者ジョン・ロバートソンが、「シドニーは、何かを証明するためではなく、もっぱら例解か説明のために直喩を用いる。このことはシドニーをラムス主義の陣営に置くように思われる。そこでは比喩的表現の機能は、説得や証明から裝飾に追いやられている」と述べていること<sup>(15)</sup>です。

T・S・エリオットの「感受性の分離」を何よりもミルトンのエピック・シミリーのなかに見出し、ミルトン的な

エピック・シミリーの発生の由来を探ろうとしたのが、私の研究の出発点でした。そういうわけで、私にとってこの評言は大変興味ぶかいものであります。シドニーは決してラムス主義者ではなかったにもかかわらず、シドニーをもラムスをも一挙に押し流していくような大きな時代の流れのなかにあつたと思われるからです。

しかし私はここで終ることを好みません。では、ミルトンは、シドニーからはもちろんマローウからも遠く離れたところまで進んでいってしまった人かというところ、必ずしもそうとはいえないところがあるからです。シドニーは、ラムスよりはジョン・デューに近い。そしてデューの思想は、マルシリオ・フィチーノが「古い神学」と称したヘルメス主義・カバラ主義にとつぷりと漬かつたもので、化学ではなく錬金術、天文学ではなく占星術といった、現代とは全く異なる世界像に基くものでした。

ところでミルトンのキリスト教教義論のなかで異端的と見なされる幾つかの教義のうちには、「無からの創造」の否定というのがあります。ミルトンはその根拠を、創世記第一章第一節の動詞「バーラー」が「無」から造ることを意味しない、「もの」(materia)から造ることを意味するからだ、といっています。そして、「もの」が神と別個に存在したとは考えられないから、創造は「神からの創造」である、といっています。<sup>(16)</sup>

ミルトンがこの教義をいだいたのはロバート・フラッドの影響によるとドニ・ソラは考えています。<sup>(17)</sup> フラッドはジョン・デューよりは四七歳ほど若いのですが、同じようにヘルメス主義者・カバラ主義者でエリザベス朝の文化に大きな影響力をもつたことは、フランシス・イエイツの業績によつて明らかです。

イエイツは、ジョン・デューやロバート・フラッドの復権がエリザベス朝の研究には不可欠であると考えた人物です。ドニ・ソラの研究を高く評価したのは当然でした。<sup>(18)</sup> ドニ・ソラは、ミルトンのなかに、神の「撤退」による創造というユダヤの神秘主義ゾハールに基く影響を認めました。「神からの創造」説では、神はすべてであるのだから、

世界を創造するためには神のうちなる或る領域を明け渡すことによって造らなければならない。これが「撤退」説です。

ただし「教義論」のなかには述べられていないので、*Teire*（「失樂園」七卷一七〇行）の一語をどういうふう<sup>(19)</sup>に解釈するかが大問題となりました。ドニ・ソラは、*Teire* は神の創造のためには不可欠な一過程で、創造行為の一環をなすものと積極的に解釈しました。それに反し、モリス・ケリーを初めとする反対者たちは、創造は御子キリストにまかせて、父なる神は創造行為から「手を引く」、というか、「距離をおく」という意味で、創造行為からの消極的な *Teire* と見なしています。両者の論争の結果、現代では、大勢は撤退説だけは取りざげた「神からの創造」説に傾いています。しかしハリー・F・ロビンズが *A Milton Encyclopedia* の「創造」の項目のなかで相変らず撤退説を堅持しています。彼には *Is This Be Heresy: A Study of Milton and Origen* という教義を論じた有名な著書のあるほどの研究者ですから、彼の説には十分な重みがあります。

ともあれ、撤退説に関しては賛否が分かれるにせよ、ミルトンが「無からの創造」を拒否したという点では共通です。だが、最近の旧約研究によると、ミルトンのいう通り、「バラー」という動詞は *ex nihilo* ではなく *ex materia* の動詞だといえます。関根正雄氏によると「無からの創造という表現が出てくるのはヘレニズム期の外典の時代で、正典の時代での旧約本来の考え方においては無からの創造ということはない」といいます。中沢洽樹氏によると、「無からの創造」は、「二世紀以後の教父たちによって形成された教理的な思想であって、旧約の思想とは異質的なものである」といいます。しかも、ミルトンと同じく伝統や信仰に固執することなく、「原文が語るところだけしか知らない」と答えるよりほかはない<sup>(20)</sup>といえます。

ミルトンの異端思想というのは、このように *ad fontes*（泉へ向かって）をモットーとするルネッサンスの果敢な追

究の結果であったことを知ります。そのとき、ヘルメス主義、カバラ主義という、ヨーロッパ正統思想の裏側にある思想が意外に、ヨーロッパ思想の古層を保存していることを知るのであります。ミルトンの真理に向かう徹底性が、彼をラムス主義者たらしめると同時に、その反対の思想とも握手させている点が興味ぶかく思われます。

## 注

- (1) Basil Willey, *Christianity Past and Present* (Cambridge University Press, 1952)  
武藤一雄・川田周雄共訳『キリスト教と現代』(創文社 一九五五)
- (2) Walter Jackson Bate, *Criticism: The Major Texts* (Harcourt Brace Jovanovich, 1952), Introduction, pp. 3-12.
- (3) Perry Miller, *The New England Mind: The Seventeenth Century* (Harvard University Press, 1967), p. 130.
- (4) *Ibid.*, p. 118.
- (5) Katherine Duncan-Jones, *Sir Philip Sidney: Courtier Poet* (Yale University Press, 1991), p. 55.
- (6) Frederick S. Boas, *Christopher Marlowe: A Biographical and Critical Study* (Oxford University Press, 1940), p. 160.  
John R. Glenn, "The Martyrdom of Ramus in Marlowe's *The Massacre at Paris*," *Papers on Language and Literature*, 9 (1973), p. 368.
- (7) Wilbur Samuel Howell, *Logic and Rhetoric in England, 1500-1700* (Princeton University Press, 1956), p. 150.  
Perry Miller, *op. cit.*, pp. 172-73.
- (8) Walter J. Ong, *Ramus, Method, and the Decay of Dialogue* (Harvard University Press, 1958), p. 258.
- (9) Gabriel Harvey, *Pierre's Supertogation*, in G. Gregory Smith (ed.), *Elizabethan Critical Essays* Vol. II (Oxford University Press, 1904), pp. 245-46.
- (10) *Complete Prose Works of John Milton*, Vol. Ⅳ (Yale University Press, 1982), pp. 387-88.
- (11) John S. Lawry, *Sidney's Two Arcadias: Pattern and Proceeding* (Cornell University Press, 1972), pp. 28-29.
- (12) William A. Ringler, Jr. (ed.), *The Poems of Sir Philip Sidney* (Oxford English Texts, 1962), p. 165.

- (13) Katherine Duncan-Jones and Jan Van Dorsten (ed.), *Miscellaneous Prose of Sir Philip Sidney* (Oxford English Texts, 1973), p. 101.
- (14) Frances A. Yates, *The Art of Memory* (The University of Chicago Press, 1966), pp. 266-86.
- (15) Jean Robertson (ed.), *Sir Philip Sidney: The Countess of Pembroke's Arcadia (The Old Arcadia)* (Oxford English Texts, 1973), p. xxxi.
- (16) *Complete Prose Works of John Milton*, Vol. VI (Yale University Press, 1973), pp. 305-10.
- (17) Denis Saurat, *Milton: Man and Thinker* (Dent, 1925, '44), p. 252.
- (18) Frances A. Yates, *The Occult Philosophy in the Elizabethan Age* (Routledge and Kegan Paul, 1979), pp. 178-79.
- (19) 内藤健一訳『魔術的ルネサンス』(晶文社、一九八四、九三)一五八―五九ページ。  
William B. Hunter, Jr., (Gen. ed.), *A Milton Encyclopedia* Vol. 2 (Associated University Press, 1978), p. 93.  
Harry, F. Robins, *If This Be Heresy: A Study of Milton and Origen* (Illinois Studies in Lang. and Lit. No. II, Urbana, Ill., 1963)
- (20) 『関根正雄著作集 第二三巻』(新地書房、一九八四)、一七ページ。「創世時代講解」
- (21) 『中沢洽樹選集 第一巻』(キリスト教図書出版社、一九九八)、一五二ページ。初出は、立教大学『キリスト教学』9号(一九六七)。

〔本稿は、一九九八年一〇月三十一日、大手前女子大学で開催された日本ミルトン・センター第二四回研究大会における口頭発表を修正・加筆したものである。なお拙著『炎の痕跡』に収録した「ミルトンとラムス論理学」或る論理学者の死——マールロウ作『パリの大虐殺』、「フィリップ・シドニーと聖パロンロミュー虐殺事件」、および「ミルトンと天地創造」(聖心女子大学論叢第九十二集)の四篇を要約したものである。そのため出典の提示が網羅的でないこと、表現に前作との重複があることをお救しいただきたい。また筆者は、本稿をさらに圧縮・要約し、一九九九年七月十八日から同二十三日にかけてヨーク大学で開催された第六回国際ミルトン・シンポジウムにおいて発表した。その英文稿「Milton and Ramus」を本誌次号に掲載したい。〕